

## 元気な釧路創造交付金 実施報告書

## 1 実施内容

団体名	災害支援くしろネットワーク
事業名	災害支援ボランティアバスの運行
課題テーマ	被災地の復興支援、及び釧路地域の人材育成
事業実施の背景	一昨年の東日本大震災により被災した東北地方沿岸部の復興支援が、依然必要とされていること。また、今後被災地域となりうる可能性のあるこのくしろ地域に、復旧関連の知識のある人材を育てる必要があると考えるため。
事業目的の達成状況	多くの高校生らが実際に被災地で活動したことで、多くのことを学びとってくれた。特に被災者の方から直に話しかけられたことが、参加者にとっての防災意識を高めることができた。
事業概要	釧路市発着のボランティアバスを運行し、現地の災害復旧作業を行う。また、沿岸地域を視察することにより、被災地の実情を学ぶ。 今回も前回同様に、高校生・大学生などの学生を中心とした募集をおこなった。
事業の実施状況	参加者51名：高校生32名、大学生3名、教職員2名、保育士1名、一般5名、世話人8名（スタッフ）  別紙 資料添付 スケジュール他
成果目標の達成状況	帰釧後、各高校において火災避難訓練が行われた。その実施状況に対して、学校と学友に問題点を指摘し、更に改善を求め、防災意識の拡大に努めている。
波及効果の達成状況	高校生は釧路市防災キャンプへの参加や発表、各学校や地域での発表を通して、防災意識の啓蒙啓発へ積極的に活動をおこなっている。
実施体制	
連携した市担当課	無 ・ 有 （ 部 課 ・ 室 ）

2 支出決算書と支出内訳

(収入)

費目	決算額 (円)	内訳
元気な釧路創造交付金	1,350,000	
自主財源	249,550	
合計	1,599,550	

(支出)

費目	決算額 (円)	内訳
対象経費		
フェリー代	644,120	/
宿泊代	844,040	/
燃料費	111,390	/
小計	1,599,550	/
対象外経費		
その他経費	0	
小計	0	
合計	1,599,550	

# 災害支援くしろネットワーク

## 第 28 次隊活動報告書

H25. 9. 20～9. 23



災害支援  
くしろ  
ネットワーク

第28次隊 隊長 山岸 伸行

私が最初に「災害支援くしろネットワーク」で活動をさせて頂いたのは2011年5月の第3次現地調査隊として、その後は2012年10月に第26次隊、そして今回の第28次隊としての参加で3度目となります。参加する上でこれまでとの違いは隊長として参加させて頂くということで、隊員は私を含めて50名、そのうち7割が高校生を中心とした学生でした。

ボランティアを行う4日間は、スケジュール通りに怪我なく行動をし、有意義な活動を隊員に行ってもらうにはどうしたらよいかを念頭に活動をさせて頂きました。

顔も名前も分からなく未成年の参加者が大半の中で自分が隊長の任務を果たせるのか不安を抱きながら釧路を出発しましたが、そんな私の不安をよそに、バスやフェリーでの移動、休憩における集合時間、ボランティア作業や宿泊時のルール等を隊員全員がしっかり守ってくれました。隊員それぞれが様々な場面において自ら率先し運営をサポートして頂いたことに大変感謝すると共に、隊員のこのボランティアに対する想いと意識の高さを感じました。また、ボランティア作業では移動時間が多く疲労がある暑い中、ひたむきに作業する学生の光る汗、純粋な笑顔からは将来の釧路の希望が見えた気もしました。

この度の28次隊に参加しようと私の心を動かしたもののひとつとして、第3次現地調査隊の一員としてガレキ撤去作業をさせて頂いた「陸中海岸グランドホテル」への宿泊がありました。このホテルは釜石湾に面する7階建ての観光ホテルで東日本大震災の津波により、2階までが浸水しホールや調理場、宴会場などが大きな損壊を受けていました。当時の様子は、1階の床は異臭を放つ汚泥が堆積し、割れた食器類、木片、漁具など原型をとどめないガレキで足の踏み場がない状態でした。上に目を配ると天井は剥がれ落ち、電線やパイプなどの金属がいたる所にぶら下がり、大型の業務用冷蔵庫などが天井に突き刺さったままでした。また、2階のバルコニーには小型の船が2艘打ち上げられてもいました。当時このホテルが再開することを想像することは私にはとても難しいことでした。

それゆえに今回2年半ぶりにこのホテルを訪れ、見違えるように綺麗になったホテル内で忙しそうに働いているスタッフの方や、食事の会場に入りきれずに列を作り並んでいる大勢のお客さんを目にした時はとても胸が熱くなりました。また、今回は私たちが以前にこのホテルのガレキ撤去作業を行なったことを野村社長さんに伝えると、野村社長は忙しい中、私たちとお話しをする時間をとってくださいました。

野村社長はこの津波でご両親と奥様を一度に亡くされ、2ヶ月程は耳の奥でゴォーと津波の音が消えず、このホテルの再建は諦め、自らも命を絶とうと考えた時もあったとお話しされていました。

あのどん底の状態からホテル再開に向けて、野村社長の心を前に向かせたことのひとつには、ボランティアの存在もあったと伺いました。この話を聞き私は、あらためてボランティアの重要性を実感することができました。人間ひとりの力は小さいが、長い時間をかけてその力が積み重なると、そこに関わった人数分の大きな想いとなり、それが人の心を

動かす大きな力にもなるのだと思いました。わずかばかりではありますがその中のひとつの「想い」「力」になれたのであればとても嬉しいことでもあります。

今回は野村社長以外にも、この震災でご家族を亡くされた方から直接お話しを聞く機会がありました。それは一度に200名以上の方が亡くなられたと言われている「鵜住居地区防災センター」の視察時のことでした。私たちが献花台に手を合わせていた時にひとりの男性が私たちに「どこから来てくれたのですか…遠いところからありがとうございます。」と声をかけて下さいました。お話を伺うとその方はこの防災センターで息子さんの奥様と4月に小学校へ入学することを楽しみにしていたお孫さんを同時に亡くされたと話して下さいました。お孫さんのご遺体はちょうどその時に私が立っているあたりでガレキの下になっている所をその方が後に見つけられたと言っておられました。

この鵜住居地区の津波発生時の避難場所は本来、500m程離れた寺や神社の裏山だったそうです。しかし4年前にこの防災センターが開設され「避難訓練の参加率を上げたい」という地区住民の要望で釜石市はこの防災センターを仮の避難所に設定したようです。ここでは震災の8日前にも津波の避難訓練が行われ、この防災センターが避難所として使用されたとも聞きました。今回の震災で犠牲になられた多くの住民の方は本来この防災センターが大雨や土砂災害時の避難所とはわからずに避難をしていたのかも知れません。お話しをして下さったこの方は私たちに「行政と地域住民のちょっとしたボタンの掛け違いで大きな犠牲がでてしまった。二度とこのようなことが起こらないよう皆さんの所でも気をつけてください」と暗く、ひんやりとした防災センター内で涙を流しながらお話しをして下さいました。

ここに来なければ知り得なかった事実だった気がしています。この痛ましい災害事例を釧路の人はどれくらい知っているのか…。釧路も海があり、山もあり、川もあります。災害に見合った避難場所の設定と地域住民への周知と確認はできているのか不安が残ります。自分の住んでいる地区や職場、学校で行われている避難訓練の避難場所はどの災害時の避難場所なのか、本当にそこで良いのか、行政や他人に任せっきりにせず自ら考え確認することが「自分の命は自分で守る」ことにつながるとも大切なことであると考えさせられました。

自分自身4度目の被災地でのボランティア活動でしたが、あらためて自分の防災意識の不足なさを痛感させられた思いです。そうは思いたくないのですがどこかでまだ、この震災を他人事としてとらえている自分がいるのかも知れません。今後はもっとこの震災を身近なものにとらえ、釧路で災害が発生した時に犠牲者が少しでも少なくなるにはどうしたらよいか、そのために今の自分ができることは何なのか考えて行きたいと思っています。

最後になりますが今回もこのような貴重な経験をさせて下さった佐々木代表をはじめ事務局スタッフ様、また、「災害支援くしろネットワーク」をご支援頂いている個人、団体、企業の皆様にお礼申し上げます。そして第28次隊の志高き隊員の皆様と共に活動できたことに心から感謝申し上げます。

ありがとうございました。